『五条橋』の弁慶役を務める吉田玉翔さん
（2023年6月17日・国立文楽劇場「第40回文楽鑑賞教室」）

特集

文楽界に新風 ベテランと若手が同格で共演

人形浄瑠璃文楽座人形遣い 吉田玉翔（よしだたましょう）さんに聞く「文楽夢想 継承伝」が目指すこと

大阪発祥で300年以上の歴史をもつ伝統芸能「人形浄瑠璃 文楽」。今年、その文楽で前代未聞といわれた公演が３年目を迎えた。師匠と弟子が揃って顔を出し、主遣（おもづか）いとして〝共演〟する「文楽夢想 継承伝」だ。企画したのは文楽座人形遣いの中堅・吉田玉翔さん（48）。主遣いになるには20年以上もの修業が必要とされる人形遣いの世界にあって、玉翔さんがあえて〝掟破り〟に挑んだ思いとは―。

吉田玉翔さん

人形浄瑠璃文楽座人形遣い、文楽夢想実行委員会大都督（だいとと）

高知県土佐清水市出身。1993年初代吉田玉男さんに入門（文楽協会研究生）、1995年初舞台。文楽協会賞（2014年）、大阪文化祭奨励賞（2022年）、第42回国立劇場文楽賞奨励賞（同年）など受賞。国立文楽劇場、国立劇場での公演、文楽協会での地方公演、海外公演のほか、2000年より高知で「翔の会」を立ち上げ定期的に公演を開催。能・狂言・落語・オペラなどとのコラボレーションや小中学生への文楽人形の指導も行い、文楽の普及に努める。2019年高知県土佐清水市観光特使に就任。2021年「文楽夢想 継承伝」を立ち上げる。料理やお菓子づくりはプロ級の腕前で、インスタグラムに多数アップ。

若手の気持ち

きっかけはコロナ禍だった。2020年３月、大阪府が「週末の大阪・兵庫往来自粛」を呼びかけ、国は東京、大阪など７都府県に初の緊急事態宣言（４月７日～５月25日）を発令。人々はワクチンも治療薬もない不安に怯え、「３密回避」「不要不急の外出自粛」が日常となった。やがて全国各地のコンサートホールや劇場が次々に上演を中止。国立文楽劇場（大阪）でも、同年４月から９月まで半年間におよぶ休演が続いた。

「これだけ長い期間休んだことは、かつてないことでした。何もしない日々が続くと、一体この先どうなるんやろうという不安な気持ちが高まってきます。それは文楽に携わる誰もが感じていたことでした。人形遣いとしては、何か月も人形に触れず、体を動かさずにいると体力的にも不安になってきます。そこで、桐竹勘十郎師匠や吉田玉男師匠たちに相談して、８月に入ると若い技芸員たちも含めて自主稽古をはじめました。そこで師匠の方々と、今は何より若手の気持ちを盛り上げていかなくてはならないという話が出ました」

文楽人形は、より人間らしい動きや感情を表現するために、人形一体を主遣い（頭部と右手を操作する中心的な役割）、左遣い（左手の動作担当）、足遣い（足の動作担当）の三人で操る。〝足10年、左10年〟といわれるように、主遣いを任されるまで長い修業期間が必要とされる奥深い世界。しかも技芸員に定年はなく、近年は高齢化に加えて文楽研修生として入門する若者が減り、この期間が長くなる傾向にある。今年６月の「文楽若手会」で『義経千本桜（いがみの権太役）』に出演した玉翔さんですら、この道30年にして〝若手〟といわれるほどである。

「中堅クラスでも難しい役を、いきなり若い人にやらせるのはどうかと思いますが、ときにはそういう人たちをメインにした公演があってもいいんじゃないか。若手の気持ちを盛り上げることは、文楽全体の盛り上げにつながりますからね」

玉翔さんは、主遣いのチャンスが遠い後輩たちがストレスを溜める気持ちは分かるという。しかもコロナ禍で公演がなくなり、若手技芸員の成長の機会が減ることを危惧する師匠たちも、若手がモチベーションを保つことは、ますます大事になっていると感じていた。

自分たちが楽しんでこそ

「普段は黒衣に頭巾を被って出ている入門10～15年の若手が、師匠と同じように紋付袴姿で顔を出し、一生懸命に主遣いをする姿をお見せすることで、お客さまにも楽しんでもらえるのではないか。何より自分たちが楽しんでやっている姿をお見せしないことには、お客さまにも楽しんでもらえないんじゃないかと思って、自分たちが観たい舞台、自分たちがやりたい役をやってみようと考えたんです」

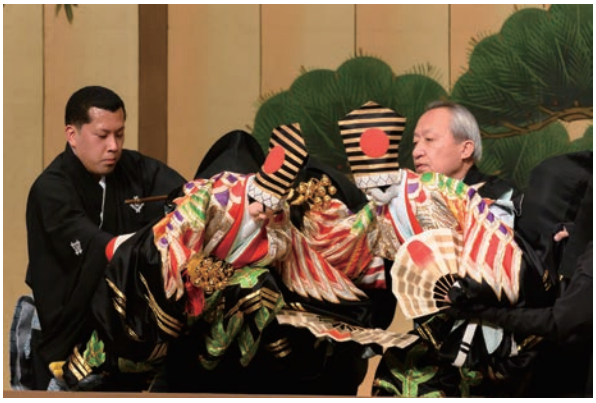
師匠（ベテラン）と弟子（若手）が同等の主遣いとして出演する『文楽夢想　継承伝』の自主公演を思いついた玉翔さんは、早速師匠たちに協力を持ちかけた。前例がなく掟破りともいうべき企画に、師匠たちは当初面食らっていたが、意図を説明すると〝それは面白い〟と一肌脱いでくれた。「僕たちは三人で一つの人形を遣いますから、お互いに協力してやっていこうという気持ちが強い。人形遣い同士はアットホームな感じです」と玉翔さんはいう。

通常、国立文楽劇場が主催する公演は劇場が演目や配役を決めるが、自主公演となると、そうした制約は一切ない。とはいえ人形や大道具・小道具類は全て国立文楽劇場の所有であるため、それらの使用料を支払わなければならず、文楽協会所属の技芸員といえども優遇されることはない。加えて劇場の使用料、チラシの印刷代、出演者（太夫、三味線、人形遣い）やスタッフの人件費なども自腹で、一度の公演に数百万円かかることもある。

そこで2021年、玉翔さんが中心となって「文楽夢想実行委員会」を立ち上げ、アーツサポート関西からの助成（70万円）を受けるとともに、初めてクラウドファンディング（CF）で公演資金を募った。支援者に対するリターン（特典）は、桐竹勘十郎さんの直筆イラストや吉田玉男さんによる文楽解説教室付き観覧チケット、出演者と歓談できるオンライン後夜祭への参加、出演者のサイン付き手形色紙や限定動画DVDなど、文楽ファンにとっては垂涎の品々ばかり。そうして30万円の目標をはるかに超える350万円近くの支援が寄せられ、技芸員たちは、文楽ファンの心遣いに感極まった。若手にとって夢の師弟共演が、こうして実現したのである。

温かい眼差し

2021年８月７日、国立文楽劇場。師匠で人間国宝の桐竹勘十郎さんと弟子の桐竹勘介さん（2009年入門）による『二人三番叟』に続いて、『傾城阿波の鳴門　順礼歌の段』では、お弓役を父である吉田一輔さん、おつる役を息子の吉田簑悠さん（2013年入門）が務めた。また『五条橋』では、師匠の吉田玉男さんが牛若丸、弟子の吉田玉路さん



師匠の桐竹勘十郎さん（右）と弟子の桐竹勘介さん（左）による『二人三番叟』。玉翔さんは黒頭巾を被って勘介さんの左遣いを担当している。（2021年8月7日『文楽夢想　継承伝』にて）

（2011年入門）が弁慶役で登場。太夫や三味線も、主に芸歴10〜15年の若手で固めた。

「僕は頭巾を被って勘十郎師匠や玉男師匠の左遣いに回りました。玉男師匠は牛若丸が初役でしたので、稽古中から〝振り覚えてるかなあ〟なんていいながら、いつもと違った雰囲気を楽しんでおられました。そういわれると一層しっかりサポートしなくてはいけないと思い、本番はいつもより緊張しましたね。弟子たちはもっと緊張した様子で、勘介君は額に大汗をかいて演じていました。僕が入門10年そこそこの頃に師匠や先輩と同等の役で出演するなんて想像もできませんでしたから、彼らが緊張する気持ちはよく分かります。お客さまは公演の趣旨をよくご理解いただいており、普段にも増して温かい目でご覧いただいているのが舞台の上まで伝わってきて、心地良かった。やって良かったと思いました」

前代未聞の師弟共演が幕を閉じると、観客は文楽技芸員たちの新たな挑戦に大きな拍手でエールを送った。

二度と見られない光景

こうした活動が注目され、2022年１月24日、文楽夢想実行委員会に「2021年度 関西元気文化圏賞（特別賞）」が贈られた。文化によって日本を元気に明るくした人や団体に、関西元気文化圏推進協議会（松本正義会長）から感謝と今後一層の活躍を期待して贈呈されるものである。玉翔さんたちの取り組みが、「通常は見られない配役で若手の飛躍にもつながった。大阪発祥の伝統芸能の未来を見据えた取り組み」と高く評価されたのである。賞贈呈式では、公演中の玉翔さんに代わって登壇した鶴澤友之助さん（三味線／2002年入門）が、多くの人の支援に感謝を述べ「今後も日本そして世界に愛される文楽であるよう一層努力していきたい」と笑顔で語った。

好評を得た『文楽夢想 継承伝』は、翌2022年８月に第２回が開催された。このときは桐竹勘十郎さんや吉田玉男さんら重鎮がそれぞれの弟子の左遣いを担当するとあって、「今となっては二度と見ることができない光景」と、ファンをときめかせた。このときもCFで公演資金を募り、目標額（100万円）の倍以上の支援が寄せられた。さらに今年９月26日には、第３回を東京の国立能楽堂で開催。玉翔さんは「今回はクラウドファンディングをしないので赤字覚悟ですが、若手の奮闘を東京のお客さまにもぜひご覧いただきたいという思いで開催することにしました」という。

文楽夢想 継承伝（東京公演）のチラシ

技芸員たちの熱い思いは、日本各地のファンの心にしっかり届いている。

吉田一輔さん（右）と吉田簑悠さん（左）による『傾城阿波の鳴門　順礼歌の段』（2021年８月７日『文楽夢想 継承伝』にて）

遊びに行く感覚

玉翔さんが初代吉田玉男さん（1919〜2006年）に入門したのは1993年、18歳のとき。しかし、中学・高校時代は野球部で練習漬けの日々を送り、文楽とは縁がなかった。

「中学１年生のときに父を亡くしました。母もその寂しさを紛らわせたかったのか、毎月のように高知の自宅から大阪まで文楽を観に行っていました。もともと日本舞踊や歌舞伎などの伝統芸能が好きな人で、知り合いを通じて玉男師匠とも懇意にさせていただいていました。そんな母に連れられて、高校１年生のときに初めて文楽を観たんです。といってもストーリーや太夫さんの言葉は分からず、〝玉男さんが出てきたら起こして〟なんていって、ほとんど居眠りをしていましたけどね。それから３度くらい連れて行ってもらったかなあ…。やがて玉男師匠が楽屋に招いてくださったり、舞台の袖から観せてくださったり、人形を触らせてもらって、〝お前、うまいがなぁ〟なんておだてられたりもしました。僕は、そうして遊ばせてくれる玉男師匠が好きでした。だから伝統芸能を鑑賞するというかしこまったものではなく、知り合いの人形遣いのおっちゃんのところへ遊びに行くという感覚で文楽と接していました」

転機は高校３年生のとき。料理をすることも好きだった玉翔さんは、卒業後は調理師の道に進もうと考え始めていた。しかし、そんな折に観た『俊寛』※や『夏祭浪花鑑』が心を動かした。

※『平家女護島〜鬼界ヶ島の段』

優しかった師匠

「いいなあって思ったんです。とくに玉男師匠が遣う団七九郎兵衛（夏祭浪花鑑の主人公）が勢いよく走って引き込む場面では、足遣いをされていた（吉田）玉佳さんが息を切らせて小幕（出演者が舞台に出入りする幕）に突進してくる。それを見て、自分もやってみたいと思いました」

人形遣いにアスリートのような格好良さを感じた玉翔さんは、高校を卒業すると、迷うことなく初代吉田玉男さんの門を叩いた。

「玉男師匠はすでに70代半ばで、孫のような年齢で敬語もちゃんと話せないような僕にも、とても優しくしてくれました。それに甘えて、弟子になっても入門前のように〝玉男さん〟って呼んでいたら、〝研究生になったんやから、そろそろ師匠って呼ばれへんか〟ってやんわりいわれましたね。

2006年に玉男師匠が亡くなるまで、ずっと師匠の足遣いをやらせてもらいました。〝道を歩いている人をよく観察しなさい。忙しそうだったり、暇そうだったり、歩き方に人の気持ちが表れている。いろんな人の歩き方を見て、それを舞台で生かしなさい〟ってよくいわれました。そんな玉男師匠は、何もしていないときは普通のおじいさんという感じでしたが、舞台に出てライトを浴びたとたん、スーパーマリオのように体がむくむくっと大きくなるように見えるんです。本当に。そして舞台に引き締まった緊張感が走る。それがとても格好良かった」

師匠と過ごしたのは10年間だったが、玉翔さんはいつも初代玉男さんのそばにいて人形遣いとしての心構えを学び、1997年10月には自身初の海外（フランス・パリ）公演も経験した。

受け継がれる想い

玉翔さんは、2022年６月の文楽若手会（大阪・東京）で『絵本太功記』の武智光秀を遣い、同年度の大阪文化祭奨励賞を受賞した。初舞台から27年目。主君を討った光秀の信念と苦悩を大きな迫力で体現し、立役を得意とする一門の伝統をしっかり継承したことが高く評価された。

賞贈呈式に「これからも芸道精進して、新たなことにも挑戦していきたい」とコメントを寄せた玉翔さんは、コロナ禍以前から、落語や狂言、オペラなどとのコラボレーション公演を積極的に行い、他のジャンルの観客に文楽の面白さを伝える活動も続けている。落語家の桂かい枝さんとのコラボレーション『落語×文楽 落楽（らくらく）パック』（2022年10月・天満天神繁昌亭）は、落語に合わせて玉翔さんが高座で人形を遣う趣向が受け、今年10月９日に玉翔さんの故郷・高知県土佐清水市でも開催される。「文楽夢想 継承伝」も、そうした新たな挑戦の一つである。

「玉男師匠は、あまり前例にとらわれずに、いろんなことをやってみようという思いの強い人で、僕もそんな師匠の姿勢が好きでした。僕自身、文楽一筋で脇目も振らず走り続ける中で経験したコロナ禍は、お客さまにもっと楽しんでいただくためにはどうするか、後輩たちがもっと熱く仕事に携わるにはどうすればいいかを、じっくり考える時間を与えてくれたように思います」

「文楽夢想 継承伝」には、文楽にかける技芸員たちの夢や想いに加え、先達のチャレンジ精神もしっかり継承されている。

（ライター 三上祥弘）

初代吉田玉男さん（左）の着付けを手伝う玉翔さん（右）（1997年）

初代吉田玉男さん（左）と入門１～２年頃の玉翔さん（右）

初代吉田玉男さん（左）と一緒に（1997年10月・フランス〈パリ〉公演時の食事会にて）

文楽若手会で『絵本太功記』の武智光秀を遣う吉田玉翔さん（2022年６月／国立文楽劇場、国立劇場）

「落語×文楽 落楽パック」での吉田玉翔さん（左）と桂かい枝さん（右）（2022年10月・天満天神繁昌亭／撮影：桂秀也）

（写真提供：文楽協会、吉田玉翔さん）2023年６月17日／国立文楽劇場にて

令和５年度（第78回）文化庁芸術祭主催公演

11月文楽公演

国立文楽劇場・11月４日（土）～26日（日）

第１部　午前10時30分開演

双蝶々曲輪日記（ふたつちょうちょうくるわにっき）
堀江相撲場の段／難波裏喧嘩の段／八幡里引窓の段

面売り（めんうり）

第２部　午後２時15分開演

奥州安達原（おうしゅうあだちがはら）
朱雀堤の段／敷妙使者の段／矢の根の段／袖萩祭文の段／貞任物語の段

第３部　午後５時45分開演

近松門左衛門300回忌
冥途の飛脚（めいどのひきゃく）
淡路町の段／封印切の段／道行相合かご

主催＝独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁